

運動部のモラルの調査 — 高校バスケットボール部 —

日比野 朔 郎

An Investigation on the Morale of Athletic Club.
— Basket-ball club in the high school —

SAKURO HIBINO

緒 言

運動部とは、スポーツ活動をすることを旨とした個人の集まったもので、自然発生的集団である。集団として、技術を磨き勝負に勝つという共通の目標をもつて、その目的遂行のために役割が分担されて、親和的協力的人間関係をもながら、技術・体力と同時にスポーツマンシップを体得してゆく継続的な活動集団である。

モラル(morale)については、グループ・ダイナミックスや産業集団心理学の立場から研究がかなり深められている。

モラルとは、心理学事典¹⁾によれば「明確に設定された集団目標があり、集団成員がその目標に積極的に意義を感じ、その達成の可能性を信じて、集団活動が協力的効果的に進められるような集団の状態あるいは特徴」と定義されている。一方、社会学辞典²⁾には、morale を志気と邦訳して「一定の定義はなく、集団に対する帰属感、(group identification)、職務に対する満足感(job satisfaction)、仕事に対する積極的意志(willingness to work)、という意味内容が付せられている。F.J. Roethlisberger は、個人の問題というよりはむしろ集団における人間関係に関した事柄である。定義をすれば、「ある集団の成員が、成員であることに満足と誇りをもつて結束し、集団の共通目的の達成に向つて積極的に努力しようとしている感情ないし態度」……とのべられている。

しかし、モラルの概念やモラルを規定する要因についても、研究者によつて意見が異なっている。また、個人的レベルの概念であるか、集団的なそれであるかについても一定していない。中には個人・集団の輻輳をいう学者もある。

産業界は生産性の向上が決定的第一義の課題であるから、産業社会学、産業集団心理学において、生産性と結びこの問題が探究されてきている。

運動部に関連しての研究は、まだなされていない。しかし、運動部の生産性を端的に表す条件がみつけ難い点はあるだろうが、運動部の運営、管理また指導上に不可欠な問題であつて早急に着手せねばならない。この研究の進展によつて、今日のマス・プロ教育に失われている集団の中の個人のあり方や運動部集団の機能の研究にも、さらにスポーツ指導に与える影響は大きなものがあると考えられる。

目 的

運動部のモラル研究の日本における第一の楔として今後の研究の手がかりを求める。

モラルに影響する条件、どのような集団の状況・特色のもとにどのように、これからどの方向にまたどの条件が強く影響するであろうかなどを考慮して、チームゲームの運動部の成績とモラルに影響する条件を検討する。

調査方法

1. 調査対象 京都バスケットボール協会高等学校体育連盟に加盟している30校のバスケットボール部部員、男子258名。
2. 調査期日 昭和42年8月8日~10日、国民体育大会京都予選会の期間。
3. 調査場所 京都市体育館。
4. 調査法 質問紙法を中心とする。
5. 手続
 - a. 高体連関係者によつて、対象クラブの実力を判定して順位づけをする。
 - b. 対象者にモラル測定尺度³⁾を適合するように修正して9項目10段階得点法に改訂した質問紙で回答をもとめた。
 - c. 調査項目は、1.役割 2.同僚との関係 3.上級

生との関係 4. 自己の悩み 5. 協力関係(チーム・ワーク) 6. 主将の信頼度 7. 活動力(ファイト) 8. 満足感 9. 雰囲気(気風)である。

(この調査は産業福祉学講座野村良彦君、杉村省吾君の卒業論文「生産性と集団諸機能に関する研究」と同対象に同時に実施したものである。)

表1 得点順位

順位	対象校	順位点
1	T. O.	29.0
2	K. Y.	28.7
3	H. E.	27.7
4	T. M.	26.0
5	M. I.	25.9
6	Y. A.	25.7
7	S. A.	23.1
8	J. Y.	21.9
9	H. I.	21.6
10	R. T.	18.9
11	O. T.	18.6
12	R. Y.	18.3
13	K. M.	15.2
14	H. A.	14.6
15	F. V.	13.7
16	R. M.	13.6
17	S. G.	12.6
18	H. K.	12.3
19	D. O.	9.4
20	O. K.	8.1
21	K. A.	7.7
22	S. U.	6.7
23	T. N.	6.6
24	M. O.	6.4
25	R. S.	4.1
26	O. T.	2.1

結果と考察

回収率 調査対象26校、回収率 86.7%、249名、回答率96.7%。

1. 実力順位

高体連に所属して対象30校の活躍に直接情報を得、熟知している9名を選出して、順位づけを依頼した。

30校を実力に従ってまづ5段階にわけ、各段階の6校を順序に並べ1から30位までとする方法をとった。

1回限りの大会成績順位では多くの要因が有機的に作用し合った結果である点から問題も残るので、かなりの期間の成績を考慮してもらい、また実力という表現をした。しかし実力が産業集団心理学という生産性の概念に運動部集団の場合あてはまるかの問題点はあるが、一応、勝負に勝つということが運動部集団の目的であろうから、両者を広い意味で同内容と考えてゆくことにした。(表1)は9名の順位づけを得点化し平均したものである。

2. 実力とモラル

実力による順位得点を5段階に分け、モラル尺度点を算出した(表2)。

第4と第2段階のモラル尺度点は高く、ついで第5段階となつている。先述の「生産性と集団諸機能に関する研究」の三隅氏のリーダー機能の型を参考とすると第4・第2段階はPm型で独裁的リーダー、第5・第1段階はPM型の民主的リーダー、第3段階はPm型の放任主義リーダーであることがわかった。

独裁型のリーダーは教育上問題はあるかもしれないが運動部集団には、実力を急速に向上させる過程にはありうると思われる。そこには個人の満足感と信頼関係に注意を注がねばならない。

民主的リーダーで実力・業績が上つている集団が望ましいが、第1段階はいわゆる同好会的な存在ではなからうか、個人的問題と人間関係とのモラル項目に高い点

表2 モラルの順位段階別尺度点

対象段階	校数	人数	項目									計
			1. 役割	2. 同僚	3. 上級生	4. 悩み	5. チームワーク	6. リーダー	7. フェイト	8. 満足感	9. 気風	
5	5	50	66.6	68.8	67.1	52.6	72.8	84.2	73.5	68.5	73.8	69.76
4	5	43	68.2	75.9	71.5	58.4	74.5	76.5	70.0	68.1	74.6	71.96
3	6	49	62.9	63.9	65.3	63.1	70.6	75.9	68.9	71.2	64.5	67.36
2	6	51	72.9	79.6	67.4	54.2	68.8	80.4	63.8	66.5	73.7	70.36
1	4	50	70.5	74.5	71.6	56.5	59.0	73.8	59.6	66.6	71.7	67.09
計	26	243	68.3	72.7	68.7	56.9	68.9	78.3	68.3	68.2	72.5	69.20

表3 モラルの上・下位群尺度点比較

項目		1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.	
		役割	同僚	上級生	悩み	チームワーク	リーダー	ファイト	満足感	気風	
種別	人数										
	点	56	65.9	67.9	66.8	53.0	71.0	81.0	72.5	65.5	73.6
	S・D		8.5	8.3	9.1	9.6	10.9	11.8	14.5	15.5	3.7
種別	人数										
	点	56	68.1	73.6	67.7	55.6	59.3	73.3	59.5	63.4	70.2
	S・D		7.8	11.9	15.2	8.4	12.3	12.2	9.7	13.3	10.4
有意差	t ₀		-1.43	-3.00	-0.38	-1.52	5.33	-3.39	5.56	8.04	2.33

* 0.1% ** 0.5%の有意差を示す

表4 モラルの相関マトリックス

1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.	項目
役割	同僚	上級生	悩み	チームワーク	リーダー	ファイト	満足感	気風	
	0.661	0.497	0.347	0.255	0.421	0.462	0.492	0.481	1
		0.692	0.355	0.521	0.632	0.541	0.668	0.690	2
			0.398	0.416	0.541	0.543	0.602	0.806	3
				0.166	0.133	0.130	0.441	0.334	4
					0.663	0.831	0.631	0.631	5
						0.756	0.580	0.589	6
							0.751	0.638	7
								0.696	8

を示している。反対に第5段階では集団機能と満足感に高い。

運動部の業績の上り方は、まづ同好会的存在から集団機能が上がり、低いレベルの目標(勝利)を獲得してゆくもり上りがある。そして自己の悩み、リーダーや成員の人間関係をほらみ、実力は一応納得できるとしての大平ムード、これが第3段階ではなかろうか。そして再び盛り上り、集団機能さらに個人の問題点も解決して、高いレベルの目標に向うような過程を踏みながら業績を上げてゆくのであろう。その間にみられるようにモラルとは盛り上りで成員が目標を明確に把握し親和的協力的人間関係をもち、目標を遂行しようとする努力、その気構えである。そこには個人と集団との両者が幅転するであろう。

3. 実力とモラル尺度項目

実力を3段階に分けてモラル尺度項目間の有意差を検討した(表3)その結果を観察しやすいように図式化したものが(図1)である。

有意差の検定から役割意識、上級生に対する問題と自己の悩みに有意差がみられない。他の6項目には有意差が認められた。

人間関係の問題は、実力に関係なく内在しているが、それよりも、集団機能に関する項目すべてに実力の上位

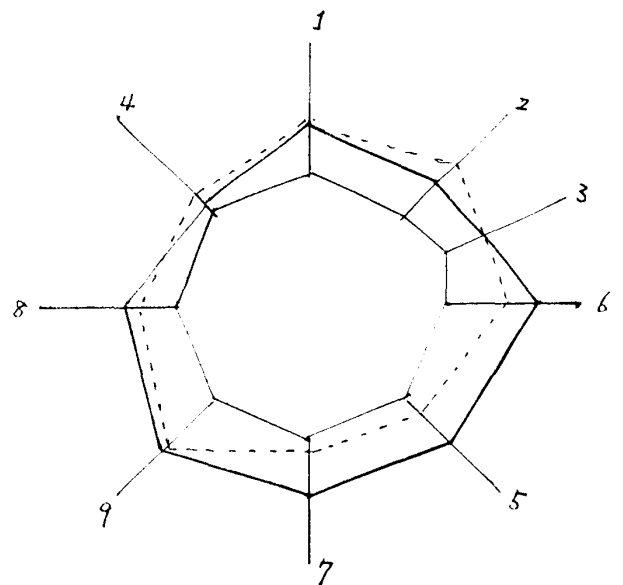


図1 モラル観察図

実線 上位群
点線 下位群

群は高く有意差が認められる。同僚間の人間関係は下位群に問題がある。とくに運動部集団は同学年毎に凝集しやすい点から指導上重要な問題を残している。

4. モラルの要因ウエイト

モラール尺度の項目間の問題で、いかなる要因がモラールに影響するであろうか、相関マトリックス(表4)と主成分分析をして考察することにした。とくに要因1に表れた数値を2乗し項目で除した値を%で表し、どれだけその項目が全体に影響しているかを表した。貢献度と名づけてみた(表5)。

表5 モラール要因ウェイトと貢献度

目項	要因	要因1	要因2	要因3	貢献度(%)
1. 役	割	0.6458	-0.3189	0.2901	8.28
2. 同	僚	0.8206	0.2466	0.1690	13.35
3. 上	級	0.7993	0.2904	0.2451	12.67
4. 悩	み	0.4255	-0.3206	0.1915	3.08
5. チーム	ワーク	0.7475	0.4622	0.2155	11.08
6. リー	ダー	0.6515	0.3342	0.2513	8.41
7. ファ	イト	0.8292	0.4754	0.1926	13.64
8. 満	足	0.8474	0.1529	0.1410	14.24
9. 気	風	0.8663	0.1797	0.1782	14.55

自己の悩みはいつれとも相関がない高い相関があるものは気風と悩み、ファイトとチーム・ワーク、リーダーそして満足感である。

第1要因は、気風、満足感、ファイト、同僚との関係、上級生との関係とチーム・ワークである、なんとつけたらよいか、集団機能と人間関係で、やろうとする気とそれを阻害する人間関係の問題であろう。第2の要因は、チームワーク、とファイトである。まとめ、協力態勢と目標への気力である。やはり個人とくに人間関係と集団機能との輻輳がみられる。

モラールに影響する要因は影響する順に気風、満足感とチーム・ワークそれに同僚との関係と上級生との関係である。

要 約

運動部のモラール研究の第一の楔として試みた調査で高校バスケットボール部男子26校258名を対象として、質問紙で実力とモラールの関係をとくモラールに影響する要因、運動部集団との状況、特色をみた。その結果を

要約するとつぎのようである。

産業集団心理学におけるモラール測定尺度を利用したが、運動部集団の二、三の特色とを考え、運動部集団のモラール尺度作成の必要性がある。新しい且重要な領域の研究となり、スポーツ指導に当るものがすべて渴望していることである。それには、Team sports, Dual sports, と Single sports などの運動部集団に調査を試み、特性を見出して加味しなくてはならない。

モラール研究を進展させて影響する要因を把握する必要があるが、集団の状況をどこからどの方向にと力動的に把握しなければならない。

モラールの概念は個人・集団の両者が輻輳していると考えべきである。人間関係と集団機能が大きな要因である。

モラールとはやる気と考えられる。目標遂行の協力態勢である。

モラールとリーダー機能そして実力とは相互に関係し合っている。民主的リーダーは人間関係そして信頼関係とも成員は満足し、チームワークという協力態勢が出来、集団の気風が力添えて目標遂行に努力することとなり、業績が向上するということになる。

モラールに影響する要因は気風、満足感とチーム・ワークそして人間関係である。

運動部集団の指導には、人間関係の調整と集団機能を高めることにあるが、モラールを高めることが要訣で、目標の明確化、役割分担と役割をよく知らしめる。コミュニケーションをよくして信頼関係の上にリーダーに民主的リーダー機能を発揮させることであろう。

(この調査の実施に当り御援助下さった体育講座小森正己先生に深く感謝致します)

参 考 文 献

- 1) 梅津他編 心理学事典 p. 242 平風社 1959.
- 2) 福武他編 社会学辞典 p. 298 有斐閣 1966.
- 3) 岸戸 護 モラール管理の方法 卷末付表 創元社 1963.